様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６８５０

研究課題名（和文）北朝～隋代華北地域の交通路に関する実証的研究―摩崖石窟等を手掛かりとして

研究課題名（英文）An enpirical study on traffic routes at the Huabei region from Northern dynasties to Sui period: with cliff stone carvings and caves as a clue

研究代表者
北村　一仁（Kitamura, Kazuto）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：６０７４８０２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，これまでの研究の上に，北朝期～隋代に刻まれた摩崖石刻及び石窟の位置情報と，近現代に敷設された交通路の情報を重ね合わせて検討することで，北朝から隋代にかけての中国北部に形成された交通路の姿を，できる限り復元するということを目標とするものであった。
　この目標に基づき，山西省の東部を中心に，河南・河北両省に及ぶ地域を対象として現地調査を行い，検討・考察を進めた。その結果，幹線道路のほか，これまでは単なる山村と考えられていたような場所にまで敷設されていた交通路の概要を知ることができ，その中でも一部のルートに関しては，かなり詳細に描き出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　まず北朝期の重要都市である太原・洛陽・平陽・ギョウなどを結ぶ交通網の実態が，より具体的に明らかになった。今後実際に発掘作業を交えつつ旧道の遺構を捜索し，具体的な経路を特定していく際，本研究で得られた当該時期の交通路に関する情報が，非常に有用となる。
　加えて，摩崖・石窟の位置を手がかりとして交通路を探る手法そのものも、今後さらに洗練していくことによって，中国史だけではなく他分野にも援用可能となり，交通史研究のさらなる展開が期待できる。
　また副次的な成果として，所在が確定できなかったいくつかの石碑・文物（「義橋碑」「楊標造像記」等）の所在も確認できた。

研究成果の概要（英文）：An aim of this research is a restore of the traffic route formed in northern China from Northern dynasties to Sui period. Based on this aim, I implement field surveys at Henan and Hebei provinces, and the eastern part of Shanxi province, and studied on traffic route at these regions.
 As a result, it was possible to know the actual condition of the transportation network, which was stretched to the place that was considered to be just a mountain village. About some routes, it was possible to draw out in some detail.

研究分野：東洋史学（中国中世史）・中国仏教史・歴史地理

キーワード：交通路　中国北朝　摩崖仏・石窟　造像銘　関門・古道遺跡　山西省　河北省　河南省

１．研究開始当初の背景

歴史学、あるいは歴史地理学上の諸問題を考えていくうえで、交通路・交通網は非常に重要な事象である。筆者は 10 年来一貫して、中国の南北朝期における「国境地域」という空間が持つ性質について興味を持ち、考察を行ってきた。その際、交通についても深い関心を有していた。例えば国境地域における軍事行動では、軍隊が実際にどの道を進軍し、どの道を補給路として用いたのかという問題は、まず最初に明らかにせねばならぬ事象である。また、僧侶が具体的にどの道を歩み、国境を越え、布教を行ったのかという問題は、仏教の教線（より具体的には、思想・経典・仏教芸術など）の広がりや移動を考察する上で、非常に重要な問題である。そして経済面においても、物流（国境を跨いだ密貿易も含む）を考察する際に、その基盤となるのが交通路である。そもそも、より一般的な関心として、当時の人々は移動する際に、どのような交通路を利用したのかという疑問も存在している。

このように、交通路という事象は、筆者個人の興味関心のみならず、歴史上の各事象を考えていく上で重要な問題なのであるが、直接の史料が不足していることにより、考察を加えることが難しい。そのような状況において、中国では中国公路交通史編審委員会編著『中国古代道路交通史』（人民交通出版社 1994）という総合的・通史的な研究があるほか、山西省に関する趙龍主編『山西交通史話』（山西春秋電子音像出版社 2005）や、陝西省に関する王開主編『陝西古代道路交通史』（人民交通出版社 1989）など、各省の道路交通に関する通史もある。また各時代の道路交通に関する専論についても、例えば秦漢時代に関しては、王子今『秦漢交通史稿』（中国人民大学出版社 2013）・『秦漢交通考古』（中国社会科学出版社 2015）等、論集・論文は特に近年増えてきている。

翻って筆者が専門とする中国北朝から隋代の交通路に関する研究状況に目をやると、まず全面的な専論は皆無である。これまでの先行研究としては、山西及び河北両省に関するものとして、前田正名氏の『平城の歴史地理学的研究』（風間書房 1979）第四章「平城をめぐる交通路」所収の一連の論考があり、河南地域については、塩沢裕仁氏『後漢魏晋南北朝都城境域研究』（雄山閣 2013）所収の論考がある。また北朝期に続く唐代の交通路に対して、非常に詳細かつ広汎な考察を加えた厳耕望氏の大著、『唐代交通図考』（中央研究院歴史語言研究所 1985-2006）もある。しかし、前田氏の検討は山西省を、塩沢氏の考察は河南省の洛陽周辺を中心とする一部地域にとどまるものであった。一方厳氏の研究は全面的なものではあるが、氏は志半ばで倒れたために未完に終わってしまった。これらのこともあって、未だ十分に考察されていない点（地域）も間々見受けられる。

さて、筆者はこのような不足を感じつつ、一方で龍谷大学アジア仏教文化研究センター（BARC）において、「南北朝～隋代仏教石刻タイムマップ」（以降「タイムマップ」と略記）の製作に、携わってきた。その際、仏教石刻（特に摩崖造像・石窟）の多くが、現在の交通路、特に省道・県道の近くに分布していることに気が付いた。これは交通路を探る手がかりになるのではないか？　ふとそう考えた。

まず雲岡・龍門両石窟のように大規模なものであれば、そこに向かうための交通路を、後から整備することがあるということは、想像に易い。現在でも、観光地となった場所に、新たな道路が整備されることは、当然普通に見られることである。しかし、より小規模な石窟や摩崖にまで、わざわざ新たな交通路を整備するであろうか？ あるいは、新たに道路を敷設する際に、それらを通るようなルートを設定するであろうか？ 恐らく答えは否であろう。このように考えるよりも、むしろ元来存在した道路沿いに作られ、その交通路が整備を重ねられ、多少の移動はあるにせよ、現在に至っていると考えた方が理にかなっているのではなかろうか。これを裏付ける史料を一つ挙げると、「錡双胡廿人等造像記」（北魏神亀 3 年（520）、陝西省耀州市出土、薬王山博物館蔵）に、「路衝に安処す」という一句がある。これによれば、交通量の多い道路（「路衝」）を意図的に選んで、石碑を立てるということがあったようである。すなわち、交通路を検討する際に、摩崖石窟とその近くの交通路を組み合わせて手掛かりとするということの妥当性が、ここからも裏付けられるのである。ちなみに、このような摩崖石窟（北朝～隋代）は、現在把握しているだけでも山西省に約 120 ヶ所あるほか、河南・河北・陝西三省にも計 60 ヶ所以上存在しており、数量面においても十分である。

ここにもう一つ、検討の手がかりとして城砦や関門の遺跡も加えることにしたい。城砦については交通路より離れたものもあるので注意が必要であるが、関門は人々の移動を制限・管理するために作られるものなので、交通路を考える上では恰好の目印となる。

よって、これらの摩崖・石窟および史跡を組み合わせて考察する。この手法は、文献史料の不足を十分に補い得るものであると言えよう。

ここで再び、上記のような研究手法を用いた先行研究の有無及びその内容について、調査を行った。管見の及ぶ限りでは、我が国において網羅的に行われた考察は当然皆無であり、僅かに河南省洛陽周辺について、塩沢裕仁氏の『後漢魏晋南北朝都城境域研究』（雄山閣 2013）で言及されている程度である。中国においても、王子今氏の「北朝石窟分布的交通地理学考察」（殷憲主編『北朝史研究 中国魏晋南北朝史国際学術研討論会論文集』商務印書館 2004）のみであった。氏の論稿は、石窟の分布から交通路を考察するものであり、筆者の興味・手法と類似している。その対象も華北地域全域に及ぶものであり、研究手法を詰めていく上で、参考とすべき点が多かった。しかし、氏の考察はまだ概略を述べるという域にとどまっている。加えて、現代の交通路についてもあまり考慮されておらず、考察対象についても石窟が中心であり、

摩崖については考慮されていない。さらに当論文を発表して以降、氏は具体的な考察を提出してはいない。よって、氏の研究も参考としつつ、筆者が「タイムマップ」作成で得た知見や手法に基づき、更なる検討を行っていくことが必要であり、有益であるという考えに至ったのである。

２．研究の目的

本研究は、北朝～隋代における華北地域の交通路を可能な限り明らかにすることを目的とする。まず、先行研究で既に指摘されている交通路については、その具体的なルートの検証・修正を行う。そして、これまで詳らかでなかった交通路に関しては、精密な考証を経て明らかにし、今後研究者の検証に堪える状態にする。そもそも、これまでの交通史研究は、ともすれば正史や地理書など編纂史料と、一部の出土文書･文字史料のみによる考察に偏りがちであった。本研究で行うような、石窟・摩崖などの文物・遺跡そのものを、近現代の交通路の現状と組み合わせ、手掛かりとするという手法によって、北朝期の交通路の多くが明らかになると信ずる。その結果、厳氏の大著がある唐代交通史研究と、近年増加傾向の漢代交通史研究の間に広がる、時間的な隙間を埋めることが期待できる。

３．研究の方法

本研究では、先に述べた目的と目標を達成するために、「タイムマップ」を参考にしつつ、厳著を手掛かりとして考古文物・文献史料を複合させ、交通路の実態を明らかにする。その具体的作業内容については以下の通りとなる。

(1)まずは厳氏前掲書の記述・地図を、正史・地理書・地方志、そして『中国歴史地図集』や現在の地図に基づき確認する。そして、「タイムマップ」を利用しつつ、『中国文物地図集』関係各省分冊に記載されている、摩崖石窟・城砦関門遺跡の記述と比較検討を行う。この作業によって、厳著に不足な点、あるいは不明な個所・検討を要する点を洗い出す。

(2)次に、その不足・不明な個所について、実際に石窟・摩崖等の考古文物と現在の交通路を手掛かりに検討する。この時利用する史資料のうち主要なものを挙げると、まず利用するのが『中国文物地図集』各省分冊である。ほか、摩崖石窟については、『三晋石刻大全』（三晋出版社）各市県区巻などの、各地における考古発掘報告書・図録類を参考とする。城砦関門遺跡については、王懐中・馬書岐『山西関隘大観』（山東画報出版社 2012）・キン生禾『山西古戦場野外考察与研究』（山西人民出版社 2013）などを参考とする。

なお、(1)・(2)の作業を行う際に、各地発行の新聞記事や、各地の地域史研究者などがネット上で発表した文章、さらには各遺跡等を踏査した愛好家のブログなども、丁寧な検討を経た上でのことではあるが、情報源として有用であることがわかったので、それらも利用しつつ、できる限り詳細な情報を集積するように努める。

(3) (1)・(2)で得られた情報に基づきフィールドワークを行う。主たる検討事項は、文物の場所（経度・緯度、周囲の環境）・内容（銘文・図像・大きさ etc）、交通路の現状である。

(4)以上の調査結果を総合的に再検討し、その検討を論文としてまとめると同時に、衛星写真もしくは地形図に落とし込み、交通図を作成する。

次に、具体的な検討対象について。本研究では華北地域を対象とするが、そのうち平野部においては、当然崖が少ないので、摩崖・石窟を作るのが困難であり、かつ比較的任意に道路を敷設することが可能である。このため上述の手法では、検討の妥当性はより低くなる。よってその考察は今後の課題とし、本研究では、摩崖石窟を造営でき、また交通路として実際に選択できるルートが谷川沿いなどある程度限られる山岳丘陵地域を対象とする。具体的に言うと、華北地域でも比較的山がちな、山西省（ほぼ全域）・河北省（西部）・河南省（北・西部）の交通路を検討の対象とする。ただ、以上の地域は広大であり、また現在想定している研究手法にも、細かな部分で妥当性を欠くところがあることが想定される。よって、まず初年度には、手始めに土地勘のある河南省に対する考察を行い、現在想定している手法の妥当性を検証し、その後順次他地域の考察を行っていくことにする。

４．研究成果

最初に、本研究の成果の詳細に関しては、別に報告論集を作成したので、そちらをご参照願いたい。（龍谷大学リポジトリ「R-SHIP」に収録。同大図書館サイト（https://library.ryukoku.ac.jp/）にて本科研のタイトルを以て検索していただければ閲覧・ダウンロード可能：全７ファイル）。ここではそのまとめの部分に基づき、概略のみを報告する。

本研究における考察を総括すると、まずその地理的範囲に関して、山西省の東部を中心に、河南・河北の一部に及ぶ地域を対象として、調査・研究を行い得た。そのことによって、これまで先行研究において等閑に付されてきた地域（例えば沁河流域の山中等）の、交通路と石刻を中心とする姿を、ごく一部ではあるが、描き出すことができた。

具体的には、主に北は太原（山西太原）、南は洛陽（河南洛陽）、東はギョウ（河北臨ショウ）、西は平陽（山西臨汾）に至る範囲について、

・太原から汾水沿いに平陽方面へ、さらに長安（陝西西安）に至るルート
・太原から南へ上党（山西長治）を通り、さらに太行山脈を超えて洛陽に至るルート
・太原から東南、現在の河北渉県を経、邯鄲（河北邯鄲）・ギョウ方面に至る「御道」
・今の山西盂県から太行山脈西側を南下、上党郡方面に至るルート
・太行山脈東側を南下、邯鄲・ギョウなどを経て洛陽に至るルート
・沁河沿いに南下、迂回路を経つつ晋城（山西晋城）方面に至るルート
等の交通路が概ね南北方向に走っていた。一方東西方向のものとしては、北から、
・今の河北常山方面から葦沢関（山西娘子関）を抜け、太原に至るルート
・邯鄲から渉県を通って上党に至り、冀氏（山西安沢、冀氏鎮）を経て絳州（山西運城一帯）方面に至るルート
・シ関（河南済源）から邵州（山西垣曲東部）・絳州方面に至るシ関道
等の交通路が挙げられる。そのほか、洛陽以遠については、洛陽から
・澗水沿い ・洛水沿い ・伊水沿い
の交通路が主として西～南方向に走り、また南方へ続くものとして、
・龍門伊闕（河南洛陽南）から臨汝（河南汝州）を経て魯陽関（河南魯山）に至り、三ア路を経て南陽（河南南陽）に至るルート
があった。南東～東方面へは、
・洛陽から東に、今の鄭州方面に至るルート
のほか、いくつかのルートで陽城（今の河南登封）に至り、そこから許昌（河南許昌）・鄭州方面に赴くルートがあった。さらに、これらの道路を結ぶように、交通路網が形成されていた。そしてその大小の道路の傍には、現在でも石窟や摩崖が存在しており、それらを手がかりとして考察したのが、本研究であるというわけである。

ただその考察の精度について言えば、当然ではあるが交通路の全てを確定するには至らなかった。しかし今後、実際に発掘調査を行った上で旧道の遺構を捜索し、具体的な経路を特定していくに際し、本研究で得られた当該時期の交通路に関する情報は、非常に有用であると確信する。このほかにも、本研究を進めていく過程において、実際に調査を行う際の細かなノウハウを蓄積できたことは大きな成果である。

もう一つ、特に摩崖仏や造像碑については、現在村落の付近に位置していることが多い。またその付近の村名を刻むものも存在している。このことからみて、当時の「村」の位置を探る手がかりとしても利用可能ではないかという推測を得た。この点に関してはもう少し事例を集めつつ、手法として妥当かどうか検討せねばならないが、少なくとも摩崖・石窟と交通路、関門遺跡という考察対象に、村落という視点を加える必要性があると考える。

今後は、基本的には本研究で用いた手法を利用し、またこの 4 年間で得られた経験を以てさらに洗練させ、陝西省を中心として東は山西省西部、西は甘粛省東部に広がる地域の交通路について、摩崖・石窟、そして城砦などの遺跡の位置を手がかりとして考察する。併せて村落の位置を検討し、地域社会と交通路、仏教石刻との関係についても着目し研究していきたい。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 7 件）

①北村　一仁、南北朝時期鄂豫地区的“蛮”和水陸交通、楼勁・陳偉編『秦漢魏晋南北朝史国際学術研討会論文集』中国社会科学出版社、査読有、2018、358-378

②北村　一仁、北朝～隋代における沁河流域の交通路―摩崖・石窟の位置を手がかりとして―、東洋史苑、査読無、90、2018、38-90

③北村　一仁、北朝期における「邑義」の諸相―国境地域における仏教と人々、窪添慶文編『魏晋南北朝史のいま』勉誠出版、査読無、2017、110-120

④北村　一仁、小川貫弌所蔵拓本初探――附「小川貫弌所蔵拓本目録（除　龍門部分）」、仏教文化研究所紀要（同朋大学仏教文化研究所）、査読無、37、2017、73-85

⑤北村　一仁、北朝国境地域における造像と人々―汝水上～中流域の状況について―、東洋史苑、査読無、86・87、2016、267-324

⑥北村　一仁、北魏・東魏時期端氏県酒氏家族的佛教造像事業、楼勁主編『魏晋南北朝史的新探索―中国魏晋南北朝史学会第十一届年会暨国際学術研討会論文集』中国社会科学出版社、査読有、2015、518-534

⑦北村　一仁、北朝国境地域における仏教造像事業と地域社会―山西陽城出土、「上官氏等合邑造釋迦仏像摩崖」を手掛かりとして―、東洋史苑、査読無、84、2015、1-46

〔その他〕（計 2 件）

①北村　一仁（編著）、北朝～隋代華北地域の交通路に関する実証的研究―摩崖石窟等を手掛かりとして―（科研費報告書・論文集）、査読無、2019、1-236

②北村　一仁、書評　倉本尚徳著『北朝仏教造像銘研究』、唐代史研究、査読無、20、2017、168-176

〔学会発表〕（計 4 件）
①北村　一仁、中古時期長治・高平地区的道路交通―従摩崖和石窟的位置来看、第六届中国中古史前沿論壇暨全球史視野下的嶺南研究国際学術研討会（中国・広西桂林）、2018

②北村　一仁、北朝後期～隋代における洛陽・登封・鄭州・許昌間の交通路 ―佛教寺院・摩崖・石窟の位置を手がかりとして、第 2 回日本洛陽学國際シンポジウム　隋唐洛陽と東アジア、2018

③北村　一仁、北朝時期ギョウ・上党之間的交通道路和摩崖・石窟、中国魏晋南北朝史学会第十二届年会暨国際学術研討会（中国・邯鄲）、2017

④北村　一仁、南北朝時期鄂豫地区的“蛮”和水陸交通、秦漢魏晋南北朝史国際学術研討会（中国・湖北襄陽）、2016

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。